ようこそ校長室へ！

Ｎｏ．７
令和５年５月１７日
発行 ： 貝塚 敦

に にこにこ笑顔で い いつもみんなで つ 紡ぎ繋げる心で に 日本一をめざすのだ

名もなき草花の幸ある生き様

当校の２名の男性職員が、この５月に、共に二人目のお子さんとなる赤ちゃんを授かりました。先日、私の妻の姪っ子もお母さんなりました。

身近な人に赤ちゃんが生まれたときには、真っ先に「おめでとう」、その次には必ず「母子ともに健康ですか？」と聞きます。子どもを産むということは命がけのことですから。

次に気になるのは、「男の子？女の子？」、そして次に「名前はもう決めた？」。こういう流れがオーソドックスでしょうか。自分の子どもではないのに、どういう名前を付けたか気になるのは私だけかもしれませんが。

さて、４月末の新潟日報の「日報抄」を興味深く読みました。次のような内容でした。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

「雑草という草はない」。これは、日本の植物学の父と言われ、膨大な植物の命名や分類に一生を捧げた植物学者の牧野富太郎の言葉だ。牧野博士は、現在放送中のＮＨＫ連続ドラマ小説「らんまん」で、神木隆之介が演じる役のモデルの人物である。

かの昭和天皇も、庭仕事を終えた侍従が雑草を刈ったと伝えると「雑草ということはない。どんな植物でもみな名前があって、それぞれの自分の好きな場所で生を営んでいる」と、侍従を諭したというエピソードが残っている。

しかし、ネット社会の昨今は、名前を堂々と名乗りにくい場合も少なくない。個人情報の最たるものであるがゆえに、名前を知られて他者から攻撃されたり、名前を間違えられて被害を受けることもある。

バスやタクシー車内で義務付けられている運転手の氏名掲示も、乗客からの悪質なクレームやネット上での誹謗中傷の回避から、見直しの動きもあるという。掲示は、運転手の責任を明確にし、トラブル時に乗客が車両を特定しやすくするためのものだった。だが、逆に乗客から悪質なクレームを受けるケースもあり、ネット上で誹謗中傷される懸念もあるための苦渋の措置である。

名乗ることがリスクになる。そんな時代ということだろうか。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

同様の理由で、先月の当校３年生の修学旅行でも、あえて名札の着用を見送りました。しかし、まだ生徒の名前も顔もよくわからない自分にとっては、名前と顔が一致しない中、名前を呼んで声をかけて話しかけようにもその術がなく、たいへん困る場面がありました。

特に、観光地やＵＳＪ等では、同じような制服の学校の生徒がたくさんいて、自校の生徒なのかどうか判断に困ることがあり、リスクを避けるための名札

の着用なしが、逆にリスクのある状況だったかもしれないと考えると、今後一考を要すると思っています。
　そもそも、問題の所在は、名札を付ける付けないの是非ではなく、あちこちで個人情報が悪用されている風潮にあるわけですから。いずれにせよ、何ともせちがらい世の中になりました。

　さて、話は変わりますが、1990 年代に、自分の子どもに「悪魔」という名前を付けた親がいて、かなりの間ワイドショーで大きく世間を賑わせたことがありました。
　「悪魔」という命名について、子どもにそんな名前を付けることが社会通念上問題があるとして役所は届け出を受理せず、法務局が親権の乱用として不受理の措置をし、最終的に親からの訴えで裁判に委ねられましたが、裁判所は「悪魔」という名前を認めたのです。
　父親が「悪魔」と名付けたかったのは、次のような理由からでした。
◇　珍しい名前だから人の記憶に残る。人の記憶に残り人が集まる。そうなれば普段合わない人と出会う確率も上がるしいろんな良い経験もできる。
◇ 悪魔は悪の世界で最強である。何かでトップになれるような子どもに育ってほしい。
　この父親の考えや思いには、その父親なりのそれなりの道理があったようです。親の権利と常識の範疇の視点で、世間の耳目を集めはしましたが、結局、その後別の名前に改名をしたのですが、命名した父親が犯罪に手を染めたことで、子どもの本名が公になるという結末を迎えました。皮肉にも、変な形で人の記憶に残ることになってしまったのです。
　名前は人にとってかけがえのないないものだと思いますし、他人と区別するだけでなく、その人が何者であるかを示し、人生の象徴であったり生きた証になったりするものだと思います。
　この世に生を受けて、人は自分で名前は付けられませんから、親や祖父母などが、自分の名前から一字とろうかとか、その時代のヒーローやタレントと同じ名前がいいとか、いろいろな思いや願いを込めて命名してくれるのだと思います。上記の悪魔という命名は問題外としてさておき、どんな名前であれ、自身のアイデンティティーとして大切にしてほしいものです。

　ただ、重要なのは名前でなく、中身です。道端に生い茂る雑草であれ、花屋の店先に並ぶ綺麗な花であれ、自らの意思でしっかりと生きようとすること自体が大切です。そして、それらを大事に育てようとする必要があるならば、水や太陽の光や時には肥料を適切に与える環境が求められます。
　いい名前？悪い名前？名もなき道端の雑草？世界にひとつだけの花？人の記憶に残る？人と出会う確率？良い経験？その世界で最強？トップ？ナンバー１？オンリー１？そんなことはあまり過剰に意識せずに、生を受けたその場その場でただ粛々とただ黙々と生を営むこと。もちろん大切に育てる必要があるならば、周囲がそれ以上に粛々と黙々と支えてあげないとです。そしてその役目は、かけがえのない命に名を冠した我々大人の責任です。
　こんにちは赤ちゃん。幸多き人生を！